

# 魚田勝臣先生のご退職にあたって

大 曾 根 匡  
経営学部教授

魚田勝臣先生のご退職にあたっての原稿を書くことになることは、20年前からわかっておりました。その20年前の1989年4月2日(月)に初めて魚田先生にお会いいたしました。その時、経営学部には8名の専任教員が入職しました。これは空前絶後と言われております。井上裕先生、魚田勝臣先生、田中稔先生、村本理恵子先生、奥村経世先生、山崎多恵子先生、佐竹弘靖先生と私の8名です。魚田先生とは専門が同じコンピュータ分野であり、企業出身ということで親しくさせていただきました。しかし、魚田先生は、私とはかなり対照的でした。コンピュータ分野が専門といっても、魚田先生は情報システムなどコンピュータの活用分野を専門とされていたのに対し、私はアルゴリズムなど計算機科学の基礎分野を専門にしておりました。また、企業出身といっても、魚田先生は三菱電機の本社や工場などで30年近く勤められ、会社帰りは銀座・赤坂・六本木などを豪遊されたのに対し、私は日立製作所の研究所に5年間しか勤務せず、会社帰りに飲みに行くことなど皆無でした。魚田先生との年齢差は18歳もあり、ベテランと新米という感じでした。

魚田先生とは入職2年目から1号館で相部屋の研究室となり、それから8年間の同居生活となりました。お互い1年間の在外研究があったので、実質は6年間の同居生活でした。基本的には、火水木が魚田先生、火木金私が私というように出校していました。ですから、火曜日と木曜日は狭い研究室で一緒に生活することになりました。さらに、夏休みや冬休みなどは、私たちは毎日のように出校していました。その当時は多くの研究室が二人

部屋でしたので、夏休みや冬休みなど講義のない日は出校しない教員がほとんどでした。にもかかわらず、他の教員は誰一人も1号館におられないのに、私たち2名だけが研究室に来ているということがしばしばありました。お互いに内心は、「今日はひとりで研究室を使いたかったのに」と思っていたと思います。

そういう状況の中で、魚田先生のお人柄やお仕事ぶりを自然と観察させてもらうことになりました。そして、魚田先生と私は性格や考え方が割合と正反対であることに気付かされました。魚田先生は社会的で行動的な性格であるのに対し、私は内向的で受動的な性格であること。魚田先生は革新的な考え方をされ、新しいことをどんどんおやりになりたがるのに対し、私は保守的な考え方をもち、物事を几帳面にやりたがることなど。野球でいえば、魚田先生がピッチャー的であり、私がキャッチャー的であると言えましょう。そういう違いがお互いをさらに親しくさせたかもしれません。さらに、いろいろの面で魚田先生と私は異なっておりました。

生活面では、魚田先生は早寝早起き、私はお遅寝(おおそね)遅起き(座布団1枚!)。魚田先生は毎日午前3時前には起床されていたようです。魚田先生からのメールの発信時刻が午前3時や4時であることが珍しくありません。そして、午前7時ごろの小田急バスに乗られて出勤されていたようです。あるいは、生田の山道を歩いて大学に来られることも多く、汗を含んだシャツが研究室に干されてあることもよくありました。

遊びの面では、魚田先生はお酒とカラオケが大好きなのに対し、私はその当時はお酒が苦手で、しかも相当な音痴でした。それなのに、行きたくもない居酒屋にイヤイヤ連れて行かされました。そして、無理やりカラオケを歌わされました。一方の魚田先生は、自製の得意曲リストをご覧になられながら、上から順番に次々と何曲も歌っておられました。小さなマツチ箱を指で器用にポロンポロンと鳴らしながらのムード歌謡曲「コモエスタ・セニョール・コモエスタ・セニョリータ」を歌われたかと思うと、次

はこれ以上ないようなしかめ面をされて「逃一けた女房にゃ、未練はな—いいが—」と喉を絞って唸られます。ネクストソングは、足を上げて軽やかに踊られながらのバタヤン「慣れのハワイ航路」を熱唱されます。このように、私の子供の頃にかすかに聞いたことがあるやなしやの歌をよく選曲されておられました。生来の明るく楽しい性格のため、どこのお店に行かれてもすぐに人気者になられ、初めて会った人ともすぐに仲良くなってしまう類いまれな才能をお持ちでした。

また、私はそれまでコップ酒で一升瓶の日本酒を飲むような品のない飲み方などやったことはなかったのに、騙されて清潔感の全くない店に連れていかれて、そして、うす汚たなそうな少し曇った瓶ビール用のコップにドクドクドクと一升瓶の日本酒を注がれ、「乾杯！」という発声とともにわけのわからないままゴクゴクゴクと飲まされました。さらに、私は内臓系の食べ物は苦手だというのに、肝臓とか腸とか胃とか変なものを勝手に注文され、食べさせられました。「ホルモンとは放るモンのことですよ。」とありがたい講釈をいただきながら、放るモンを口の中に放り込まれました。「焼酎は先にお湯を入れてから後から焼酎を入れるべし」とか魚田先生流の作法をたくさん教わりました。

性格面では、魚田先生はアバウトというか豪放というかそういう性格なのに対し、一方、私は慎重そのものの性格でした。その性格の違いは講義の仕方においてもよく表われておりました。魚田先生はたった紙1枚の講義レジュメを作成し、それだけで90分間見事に軽やかに澁みなく講義をされてしまうのに対し、私は1回の講義に対し何ページもの講義ノートを準備し、そのノート通りに板書をしながら一方的に講義をしておりました。そして、予定通りの講義ができなかった場合、私は不満顔であったのに対し、魚田先生は、楽しそうに「こんなことがあって講義がうまくいかなかったよ。OKOK。」とおっしゃりながら、進行通り進まなかったことをむしろ楽しんでおられるように見受けられました。

また、魚田先生は学生の自主性を重んじ、学生が自ら気づくことに力を注がれておられました。授業中に騒がしい学生がいるときも、私はすぐに「静かにしなさい。」と絶叫するのに対し、魚田先生はただ黙って教壇の前に立たれて、教室が静かになるのを待たれます。私も一度だけ試してみたのですが、不思議なもので4、5分間教壇の前で黙って立っているだけで教室は静かになりました。待っていれば学生は気づくのですね。私はその4、5分間を待てない性格なものですから、今でも叫び続けています。

「教育」に関しては、私は自分が「教える」ことに喜びを感じていたのに対し、魚田先生は学生を「育む」ことに心を注がれておられるようでした。ゼミナールの学生の指導でも、私は手取り足取り教えてしまう性癖があるのに対し、魚田先生は学生が自分で調べて自分で解決するのを根気よく待たれます。ゼミナール活動も学生が主体的に行うように暗に指導されておられました。魚田ゼミは話し合いが多いとよく学生から聞きますが、それは魚田先生がゼミの運営に対してなるべく口を出さないようにしておられたからです。その話し合いのプロセスを体験することによって、学生は育つと確信しておられたようです。一方、「ハウレンソウ（報告・連絡・相談）」はしっかりと学生に守らせ、それによりゼミの様子はきちんと把握されておられました。そして、問題のある局面では学生をすぐに呼び出し、相談に乗られたり、アドバイスを授けたりしておられました。自信を失ったり、挫折感を抱いたり、やる気をなくしたりした学生を何人も立て直しておられました。魚田先生は学生自身の父親と同等の役割を果たしておられたのではないのでしょうか。そのため、魚田ゼミの学生は皆、逞しく育ち、社会に巣立っていきました。そして、毎年のOB会には大勢の卒業生が集まってきます。先日の魚田先生の最終講義のときにも、大勢の卒業生が教室に大挙して集結しておりました。これも魚田先生の厳しくも愛情あふれる指導の賜物でしょう。

魚田先生は、これまでの長い社会経験から、人間としての基礎力やマナ

ーを学生に身につけさせたいと考えておられたのではないのでしょうか。企業での長い経験に基づいた魚田先生流の教育をされてこられたと思います。表面的な知識や技能はすぐに何の役にも立たなくなる。環境が変わっても道具が変わっても役に立つ、そういう知識や技能を身につけさせようと言われておられたと私は思います。そのひとつの集大成が、魚田先生が中心となられて約10年前に新規に開講した「情報リテラシ」であると思います。ここでいう「情報リテラシ」は「コンピュータリテラシ」とは似て非なるものです。「コンピュータリテラシ」はコンピュータの操作能力のことをいいますが、「情報リテラシ」は情報の活用能力のことをいいます。したがって、情報リテラシはコンピュータのない時代から存在した基礎的な能力であり、コンピュータがどんなに進化しても、あるいは、別の形の道具になってからも必要な能力です。世の中の環境や道具の変化に依存しない基礎的な能力をいかに学生に身につけさせるかということ、魚田先生は教育上のひとつのテーマとして研究され、それを具現化することに多大な努力を払ってこられました。その「情報リテラシ」が、新カリキュラムでは選択必修科目の「情報リテラシ基礎演習」という新たな形になり、経営学部が目玉の講義として発展しております。また、企業におられた経験を活かされて、「企業研修」も他の先生方と協力されて開講されました。これにより、他学部に先駆けた経営学部独自のインターンシップを確立できました。

さらに、「必修科目に対しては共通教科書を用意すべし」という持論を早くから唱え、実際に情報系の必修科目用の教科書を魚田先生が中心となられて製作されました。それが、「コンピュータ概論—情報システム入門—」、「ITテキスト基礎情報リテラシ」、「コンピュータリテラシー—情報処理入門—」の3部作です。まさに有言実行の方です。そして、改訂を重ねることにより陳腐化をさせないよう配慮した結果、現在でも多くの大学で教科書として採用され続けています。

魚田先生との思い出はたくさんありすぎて語り尽くせませんが、この拙稿では魚田先生のお人柄と教育の面でのエピソードだけに絞って書かせていただきました。魚田先生は学生の教育を何よりも大切に、そして楽しみにしておられました。そういう私も、自然と魚田先生の薫陶を受けました。現在では、私も学生の反応を見ながら、講義ノートに縛られることなく楽しんで講義をするようになってきました。私のゼミも学生が主体的に活動するようになりつつあります。学生が自ら調べて解決するようなスタイルになりつつあります。私の性格も年齢とともにだんだんアバウトになってまいりました。お酒も多少は飲めるようになってしまいました。多分、魚田先生は、私が教員として育つのを我慢強く見守ってこられたのではないのでしょうか。先生から学ばせていただいた秘術もたくさんあります。そのうちのひとつ「原稿は締切日が来てから書くもの」も忠実に守っております。この原稿も締切日になってから書き始めました。そして、年を越してしまいました。20年前から書くことがわかっていながら……。先生と20年間も御一緒できたことは、私の誇りです。それでは先生、いつまでもお元気で。そして、ありがとうございました。

(2009年元旦)